

受賞のことは（著書部門）

寺崎新一郎（立命館大学）

この度は異文化経営学会 2022 年度学会賞（著書部門）に拙著『多文化社会の消費者認知構造：グローバル化とカントリー・バイアス』（早稲田大学出版部）をご選出いただき誠にありがとうございます。審査委員長の高橋俊一先生を始め、審査にあられた匿名の先生方、ご推薦いただいた古川裕康先生、会場にて素敵な賞状と記念品を授与して下さった馬越恵美子先生、そして入会のきっかけとなった池上重輔先生に心よりお礼申し上げます。本書は私の博士論文をもとに執筆されたものですが、主査の恩藏直人先生、副査の太田正孝先生（故人）及び守口剛先生、出版の機会をくださった早稲田大学出版部の須賀晃一先生、谷俊宏様、武田文彦様にもこの場を借りて深謝申し上げます。

受賞の当日は佐脇英志先生のフォローのもと、総合司会を務めさせていただきましたが、偶然にも太田正孝先生の奥様である、太田みどり様と対面し、内心では涙をこらえておりました。本邦、異文化経営の泰斗である太田先生からは、「始めは認められなくても、自分の信じた道を力強く歩み続けければ、いつか花開くときが来る」と度々激励を受けていただけに、授賞式はより感慨深いものとなりました。

太田先生の言葉にあるように、テーマ設定では需要の有無よりも、楽しいと感じられるかどうかを大切にしてきました。その上で、地道に研究を重ねてきた成果が評価され、大変光栄に存じます。

本書は私がロンドンに大学院留学していた時の経験に着想を得たもので、人々がどのような過程を経て外国や異文化に関心を抱くようになるのか、また、こうした人々にどのようなマーケティング・コミュニケーションが有効なのかといった課題に対して、質と量の両面から議論を展開して参りました。世界で最も多国籍な都市の一つ、ロンドンでの生活を通して、外国人としての自分をメタ認知し、そこから得られた着想を学術的見地から紐解くことで、研究テーマやリサーチ・クエスションが絞り込まれていきました。こうした先行研究との照らし合わせは、簡単なようで骨の折れる作業ではありますが、執筆を通してヒトの認知や感情、そして行動のより良い理解につながるなど、非常にやりがいのある経験となりました。最近では、本学会を通して様々な領域で活躍される先生方や実務家の皆様の声を聴くことができ、自分の専門領域のスコープも広がりそうな気がいたします。

特定国家に対する消費者のアフィニティ（好意や愛着）やアニモシティ（敵対心）といった、相反するカントリー・バイアスがもたらす混合感情の研究など、まだ本書では十分な議論ができなかった領域もあり、今後もこうした未開のテーマに対して精進を続けてまいる所存です。学者として自己研鑽に励みつつ、その知見をより社会に還元していくことができれば望外の喜びです。学会員の皆様におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。